

目的 現代の大学生は服装に対して高い関心を持ち、自分自身を表現する一つ的手段として被服を用いている。本研究では、日本と韓国における女子学生の社会的態度－社会に対する考え方を測定し、この社会的態度が服装関心度および伝統被服に対する態度、着用にとどのように影響しているかを比較検討した。

方法 社会的態度については、加藤らによって作成された40項目のうち、27項目を用いて測定した。評定結果をもとに、因子分析によって基本的因子を抽出し、日本と韓国の違いを検討した。服装関心度は、服装への関心の程度を測定する18項目を用いて測定し、伝統被服に対する態度は伝統被服に対する好意的あるいは非好意的な内容を持つ20項目によって測定した。伝統被服の着用行動については、伝統被服の1年間あたりの着用回数、所持枚数などを測定した。各対象者の服装関心度の得点と伝統被服に対する態度得点は、各項目信頼性分析後への反応得点を合計して算出した。

結果 社会的態度に対する因子分析の結果、4つの因子が抽出され、第1因子；革新的態度(因子寄与率12.2%)、第2因子；合理的・個人的態度(9.1%)、第3因子；感覚的・娯楽的態度(7.5%)、第4因子；伝統的態度(5.4%)で、4因子の累積寄与率は34.2%であった。この社会的態度の各対象者の因子得点を用い、服装関心度、伝統被服に対する態度およびの着用とクロス分析を行った結果、日本の場合には、感覚的・娯楽的態度が強い者は服装関心度が高く、韓国の場合には、革新的態度が強い者は服装関心度が高い結果を得た。また、日韓いずれにおいても伝統被服に対する態度と社会的態度との関連は認められなかった。